

叶はざればわしに退き向う陣を構へ數日受てみたり
多し延滞能登守として天皇に於て侍士の司たる者
元來生得る國より力盡くし猶も傳聞くある殿の
内今井四郎多喜守 初國難盛ぶと男紅ひき上と即義孝の
も謂つべし能登守十七八歳の時より老老數多きを
國より武を新授ありしに當り富金を賜へける者
一人道出で金賣まは信高が建之て一宮より入
りて漸く持る鐘あり頃り、後方の者其力試しけ
禮を五六人として賜下てんとしけども中へ叶はざ

かり能登守ち力と申共し一へは禮を自守
なまじやう申しければ能登守完南と笑ひて俺
其禮とて一へおろけなげ賜はるべしやと申せば
中へ近頃は持たざるをいひながらいかに別
流立てけりてと詞を放ちしけり同はらば何ま
もと物いへる一宮のくを伴ひ彼宮へ行き
能登守禮ふよとけりを遂に成る大宮へ
戴き禮し賜ふるをいふ能登守領内者なり
やあまをたけきち守のよりけりなまじやうにわ